

歴代誌第二 20 章 17-22 節 「これからの勝利を喜ぶ」

1A 神の約束

1B しっかりと立つ

2B 恐れてはならない

3B 出陣せよ

2A 主への礼拝

3A 敵前での喜び

歴代誌第二、20 章を開いてください。私たちは今日、ヨシャパテ王の生涯を読みます。今朝は 17 節から 22 節に注目したいと思います。

20:17 この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかりと立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。』20:18 それで、ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主を礼拝し、20:19 ケハテ族、コラ族のレビ人たちが立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。20:20 こうして、彼らは翌朝早く、テコアの荒野へ出陣した。出陣のとき、ヨシャパテは立ち上がって言った。「ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」20:21 それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」20:22 彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。

私たちは歴代誌第二の学びで、「主を求める」ことについてずっと学んできました。自分の拠り所を主に求めるのか、その思いと力を主に固定させるか、そうでないかが問われている書物です。ヨシャパテの時代に、死海の東にあるモアブ、そしてモアブの北にいるアモン、それから死海の南にいる者たちが連合して、ユダに攻め入ってきました。ヨシャパテは、自分たちでは到底勝ち目がないことを悟って、恐れが襲いましたが、主を熱心に求めました。彼の特徴は、すべての民を集めたこと、妻や子供までも共にいたことです。自分だけでなく、民にも同じように神の律法を教えさせていましたが、祈りにおいてもエルサレムの神殿の前に集めさせ、主を求めました。

彼は認めました、12 節です。「私たちに立ち向かって来たこのおびただしい大軍に当たる力は、私たちにはありません。私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです。」王として、立ち向かえないことを告白しました。どうすればよいか分かりませんでした。けれども、彼は最善の方法を取りました。目を注ぐのみだ、と言っています。問題から目

を逸らし、主の目を向けることです。私たちはしばしば、自分で何とかしようとして思いをいっぱいにします。そこに恐れや焦りが出てきます。ちょうど、ペテロが、風が吹いて波が高くなったのを見たので、水の中に溺れてしまったようにです。イエスにしっかりと目を留めていなければいけませんでした。

そして、しばらく主を待ち望んでいたのでしょうか。レビ人で歌うたいの一人が御霊に示されて預言したのです。15 節からです。「ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。『あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。』自分の戦いではなく、神の戦いであることを知るとはとても安心しますね。私たちが問題に対処している時に、それが神によるものだとして受け入れられる時に楽になります。自分が戦わなければいけないと思うと、神はご自分の手を引いて、私が戦うようにそのままにされます。自分がそれで戦いでもう自分ではできないことを悟って、神に呼び求める時、その時に神はようやく私を助けることができます。自分ではなく、神の問題であることを知るので。

1A 神の約束

そして 17 節に、先ほど読んだ神の約束が書かれています。もう一度読みます。「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。」

1B しっかりと立つ

しっかりと立ちなさい、という命令があります。そして動いてはいけません。このことをしっかり行っていれば、自分ではなく主が自分を救ってくださいます。パウロがテサロニケの人たちに対して、こう言いました。「あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。(1テサロニケ 3:8)」テサロニケの人たちは、大きな困難におり迫害を受けていました。けれども、イエス・キリストを信じる信仰に立っていました。パウロも、自分のことを気にせず、いつも彼らのことを思って感謝しており、彼らの「信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐(1:3)」のことを祈っていました。この三つに心を合わせてさえいれば、後は主が救ってくださいます。困難からも救ってくださいます。自分が主を信じる信仰に立っているか。そして、他者のことを気にかけて、愛をもって労苦しているか。それから、主が今にでも戻ってこられるから、だからもっと忍耐しているか。

一度、面白いことを何人かの方々にお話ししたことがあると思います。六月にカルバリーチャペルの牧師会議がありました。私はそこに初めて出席しました。そして、分科会に出て、リーダーシップの学びをしました。そこで薦められた本をさっそく、書店に行って購入しました。そのことを、カルバリー国分寺の知主夫さんに話したら、「その本って、スクール・オブ・ミニストリーの教科書だ

ったよね？」と言われたのです。えっ？と思い本棚を探したら、ありました！そして、それを読んだことがあることも思い出しました。

自分が足りないと思って、他のところを探していたら、実は目の前にその探しているものがあつた、ということです。これを霊的にも私たちはしばしば行います。どうやったら、自分は信仰をもっと深めることができるのか。どうやったら愛を増し加えることができるのか。どうやったら、希望を持つことができるのか？とても簡単です。実践してください、この教会で実践してください。「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ 1:23)」教会だからこそ、できます。そして奮闘してください。分からなければ、祈ってください。そして牧者や、その他の成熟したクリスチャンに尋ねてみてください。他のどの神学校や聖書学校に行くよりも、満たしがあることでしょう。

知っていることは、すでに知っている私たちはしばしばあしらってしまいます。そして、単純で、地味なところに留まっていることを嫌います。そして、何かもっと良いものがないかと探し回るので、けれども違いますね。または今、前にもう進めないと圧倒されている方がおられるかもしれません。けれども、主が必ず救ってくださいます。自分がしなければいけないのは、神が救うという約束にしっかりと留まっていることです。

そして、そこから、その信仰の確信から次に進むのです。使徒パウロは、「私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。(ピリピ 3:16)」と言いました。すでに達していないところから進もうとすると、必ずつまづきます。水泳をしている方は、一かき、一かき、前に水をかいていくから進むことを知っています。それを忘れて慌てて進もうとすると、必ず溺れます。スケートリンクも同じです。一歩ずつ、足を滑らせます。だから前に進んでいくことができます。

例えば、伝道をしているけれども信じてくれない？それならば、祈ればよいのです。その人のために祈るのです。伝道をどうすればよいか分からない？十字架につけられたキリストを伝えればよいのです。実は、十字架が分かっている？そうすれば、もう一度、自分の信仰を確かめればよいのです。自分は伝道していて、なかなか信じてくれないと思っていたけれども、実は自分自身が十字架の奥義を知らなかった、ということがありえます。慌てなくてよいのです、そこを基準として進めばよいのです。

2B 恐れてはならない

そして、「恐れてはならない。気落ちしてはならない。」と主は言われます。恐れることも、気落ちすることも、私たちは頻繁に経験します。だから、聖書ではひっきりなしに「恐れてはならない」という命令を与えています。恐れと信仰は正反対のものです。恐れがある時は信じていません。また信じていないと恐れが入ってきます。愛と恐れも正反対です。恐れは罰が伴いますが、全き愛は恐れを締め出します。愛に満たされていますか、信仰に満たされていますか？

3B 出陣せよ

そして「あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。」と言います。自分が戦うのではなく、主が戦うのであれば、自分は退却してもよいと思うところですが、主は、「彼らに向かって出陣せよ」と言われるのです。それはなぜか？「主はあなたがたとともにいる」と言われます。つまり主は、私たちと共に働きたいと願われています。私たちが主の御心に自分を従わせることによって、キリストの御霊に自分を明け渡していくことによって、主が自分を通して働いてくださいます。

だから、自分の体を動かさないといけません。「死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。(ローマ 6:13)」捧げるのです。神のご用に差し出すのです。そうしたら、神がその器にご自分の霊で満たしてくださいます。そして、その器と共に働いてくださるのです。

2A 主への礼拝

こうしてヨシャパテは、レビ人による神の預言の言葉を聞きました。そして、彼が行ったことは驚くべきことです。それは、「礼拝を捧げることによって、肉の武器に対抗する」ということでした。18-19節をもう一度見てください。「18 それで、ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主を礼拝し、19 ケハテ族、コラ族のレビ人たちが立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。」なぜ、彼らが主を礼拝し、賛美できたのでしょうか？それは、神の約束の恵みに触れたからです。まだその通りになっていないけれども、信仰によってそれを既に受けたものとしてお迎えしたのです。

まだ実現していないのに、それを既に受けたものとしています。聖書には、そのような約束に満ちています。皆さんにお尋ねします。救われましたか？救われたとそのまま答えることができた人に尋ねます。まだ、天国に入っていないですね。まだ体も贖われていませんね。なんで、救われたと言えるのですか？そうなんです、これから起こること、将来の約束もすべて完了したのものとして私たちは受け取ることができるからです。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。(エペソ 2:8)」救われる、と書いていないで、救われた、と書いてあります。

ローマ書では、「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。(8:30)」とあります。予め定めたのは、永遠の昔です。召したのは、救われた時です。そして、義と認められますが、栄光もすでに与えられたとあります。これは体が栄光の姿に変えられる、将来の話です。それにも関わらず、このようにしてすでに完了したのものとして話すことができるのです。

なぜか？礼拝を捧げたということが重要な点です。彼らが礼拝を捧げているのは、永遠の神です。黙示録を読むと、天において永遠の方に礼拝を捧げている姿が数多く出てきます。例えば 4

章 8 節、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」昔も、今も、後も、神にとっては同時に存在しています。時空間を超えた方なのです。したがって、みなさんがキリストにあって選ばれたのも、召されたのも、義と認められ、そして後に栄光の姿に変えられるのも、神にとっては同一の地点に存在するのです。この神をあげているので、私たちはまだ目で約束のものを見ていないけれども、信仰によって栄えに満ちた、言葉に言い表すことのできない喜びにみたまされています。

この永遠の領域に入るので。これは聖霊がそれぞれに油注ぎを行われなければ、決して見えるものではありません。悟ることはできません。これは全く、超自然的な神の霊の働きなのです。

ですから、礼拝が大事です。そして賛美が大事です。もし礼拝が説教だけならば、それは教えだけ聞いて、「良いお話しでした」ということになってしまうでしょう。礼拝は、その言葉のとおり、ひれ伏して拝することです。神を神としてあげめるのですから、賛美から始まります。そして、自分のものの権利を神の前で放棄します。それが献金です。そして、神の語られる言葉に応答して決断するのです。

3A 敵前での喜び

そして 20-21 節において、ヨシャパテは実際に敵陣に民を行かせます。「ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」21 それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」

私たちが礼拝を捧げ、そして賛美を捧げることによって、初めて具体的な行動に移すことができます。これまで取り組むことどころか、直視することのできないことに立ち向かうことができるようになります。そして激励します、基本的に「信じなさい」という激励です。預言者を信じなさい、と言っていますが、それは預言者の言葉は神からのものだからだ、ということです。つまり、私たちにとっては聖書です。聖書が言っているのだから、という理由だけで、それを信じて喜ぶのです。

そして驚くべきことをヨシャパテは行かせます。武装した者を最前線に置くのではなく、賛美を指揮する者たちを、その大軍と対峙する前線に置いたのです。ここに、ヨシャパテの驚くべき霊的成熟を見ます。すなわち、霊的な力は、肉の力を打ち破ることができるということです。「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。(2コリント 10:4)」すべての肉の力に対して、祈りを持ってくるのです。讚美を持ってくるのです。私たちはどうしても、肉の力を持ってきて、それから補助的に祈りの力に頼ろうとします。そうではありません。その逆が真なり、なのです。

アメリカ合衆国は、本人たちに聞けばキリスト教国ではないと言いますが、今でも議会の開会の前に祈りを捧げます。最近、カルバリーチャペル・チノヒルズの牧師ジャック・ヒブズさんが呼ばれて、祈りを捧げました。もちろん全能の神に対して、そして何よりも、イエス・キリストの名によって祈りました。それが、単なるアクセサリーのような付属的存在でない事を願います。世界に軍隊を置くこの国の力よりも、祈りがはるかに力強いのです。

これはキリスト教国だから、と思われるかもしれませんが。しかし隣の中国はどうでしょうか？最近、NHK で特集を組んで、中国のキリスト教徒が共産党員よりをしのぐ人数になった。共産党も宗教の社会における役割を認めざるをえなくなった、という報道をしていました。では、その国の、しかも無神論を掲げている指導者さえも動かざるをえないキリスト者たちとは、おんぼろのアパートで熱心に祈りと讃美を捧げている素朴な出稼ぎ労働者だったりするのです。

そして、実はこの日本にも、霊的な力は及んでいました。日本初の教団に、「ホーリネス」というのがあります。昭和初期に、「ホーリネスのリバイバル」というのが起きました。それはカトリックではなく、むしろ聖書をそのまま信じる福音信仰で、聖霊の働きを信じ、キリストの再臨を強く信じる人々でした。ホーリネス系の教団の方が、こう仰いました。「家内の実家は山形の内陸です。父親は、小学校の校長まで勤めて5年ほど前に逝去しました。もちろん、仏教です。この人が言っていました。このリバイバルの時は「疫病のようにこの山奥までキリスト教が入ってきた。」というのです。」肉の力よりも、霊の力が強いのです。

そして最後に彼らは「喜び」ました。22 節です、「彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。」彼らの喜びの聲が、これらの大軍を打ち負かしました。主を喜ぶことは、私たちの力です。

聖書には、まだ勝利する前に勝利を信じて打ち勝った人々で満ちています。例えば、アブラハムです。彼は百歳になっているのに子を生ませていませんでした。ところが、主の使いが来年の今頃、サラに男の子ができています、と言いました。それを彼は信じました。そして、こう書いてあります。「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰した、と(ローマ 4:20)。約束を信じただけで、栄光を神に帰していた、賛美していたのです。そしてパウロとシラスがピリピで鞭打たれて、牢獄に入れられていた時に、「神に祈りつつ、神に賛美の歌をうたっている」とあります(使徒 16:25)。そして大地震が起こって、牢獄の鎖がみな解け落ちました。この信仰によって私たちは神を喜ばすことができます。勝利をする前に、主の約束を堅く信じて、栄光を帰しはじめるのです。